平松礼二はジヴェルニーの睡蓮を開花させる

ジョゼフィーヌ・バンデ 2018 年 6 月 20 日

クロード・モネに敬意を表して、日本人画家平松礼二は７枚の絵と2点の屏風をジヴェルニー印象派美術館に展示した。繊細な金の波、小さな睡蓮などをちりばめた彼の絵は日本画の技法に従ったものだ。桑の葉の繊維から金色の葉まで、螺鈿で表現された千年にもわたるアートは次のようにして創られるのだ。

1.「はかなさ」にズーム

小花の群れ、睡蓮、沢山の木の葉 ： 平松の絵は繊細な具象的モチーフを散りばめて目を眩ます。彼は日本画の基本は忠実に守っている: 光の反射、通り過ぎる魚、または紙吹雪のように飛び散った花びらなど、それは脆く揺れ動く束の間の美だ。モネのようなクリーム状のタッチではないが、平松が描くのは、自然のはかなさが持つ美のヴァリエーションを表現したいというモネのアート精神であり、睡蓮、柳、水に映る影といったジヴェルニーでモネが表現したくてもがいたモチーフなのだ。*モネの池*、*緑陰*（2011）では、平松はこのフランス人画家が 1907 年に用いた円形のキャンバスを使っている。

平松礼二 *初秋の池* 2010 年

2. ひたすら「忍耐」

しかし日本画家として秀でるのは並大抵のことではない：日本画の技法習得には少なくとも 10 年の修行を要するからだ！謙虚さ、器用さ、そして感性、この三つが基本となる。日本画を描き始める時まず画家は、自然から抽出した素材を基に、製作に必要な絵具を自分自身で創り出さなければならない。この、神道（木、岩、水の流れの中に不可視のエスプリが宿るとする日本独自の宗教）と仏教の禅（それが強いる忍耐）に深く結びついたアートを実践しながら、画家は活動的な瞑想に深く沈みこんだ自分を見出すのだ‥‥。

写真　平松礼二

3. 自然素材の顔料

チューブ入り絵具を買うなど論外だ：ラスコー壁画の有史前の作者たちのように、画家は自分の手で自然素材を砕きながら絵具を生み出していく。真珠の白（胡粉・白雪）はこのようにして、牡蠣の殻の中にある炭酸カルシウムが砕かれ、篩（ふるい）にかけられて初めて出現してくるものだ。青色は、何種類かの石とその鉱物物質（藍銅鉱、トルコ石、ラピスラズリ）から抽出されるし、灰色がかった緑はマラカイト（青銅の鉱物）、赤色硫化水銀（水銀の鉱物）またはカイガラムシで作られる赤、土やオークルで作られる黄、等々。

平松礼二　*モネの池に夕の雲映る　2013*

4. 貴重な繊維

基板として、画家は板に張り付けた絹または紙を使う。それらは手作りで、望む吸収の程度によって厚さが変わってくる。紙は顔料の付着に十分に耐え得る長い繊維で丈夫でなければならない。画家は普通和紙を使う：桑の木の繊維を用いた職人作りの紙で、日本では７世紀から製造されている。その製作技法はユネスコの人類無形文化遺産のリストに登録されている。

平松礼二　*ジヴェルニー　モネの池　微風* 2013

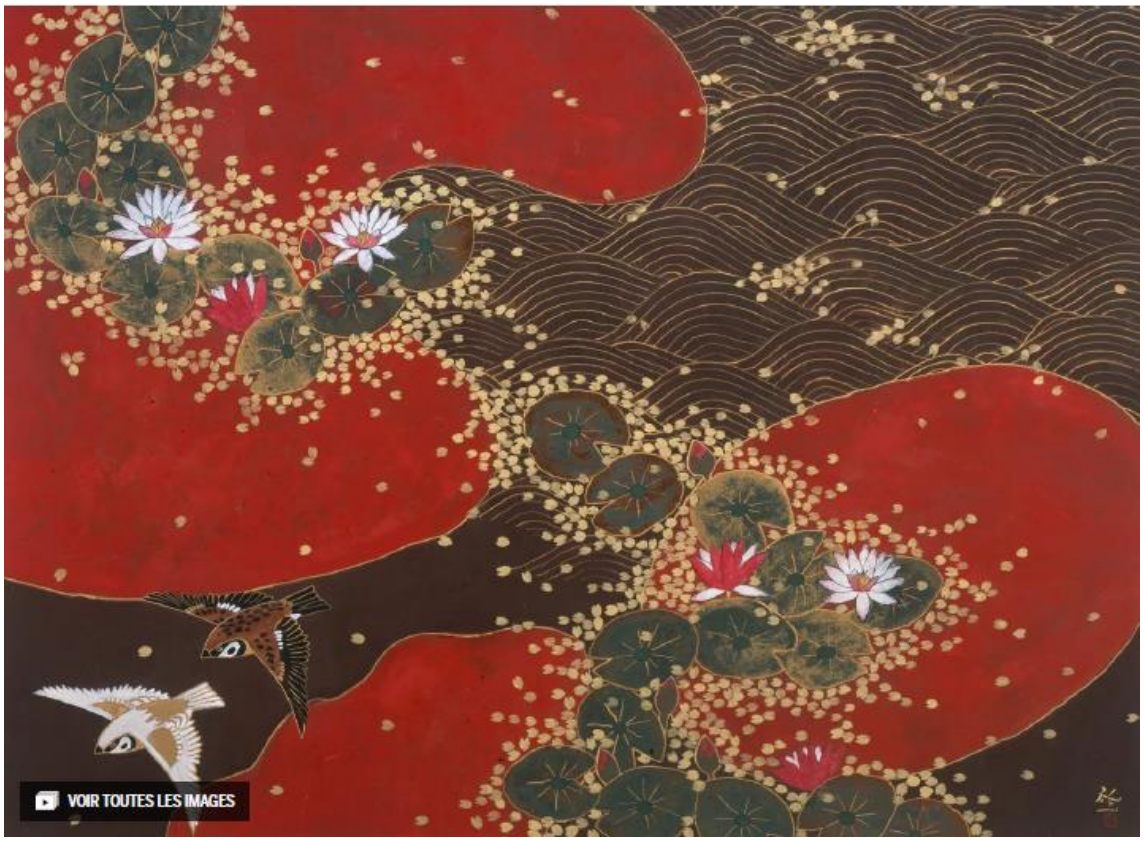
5. 秘密の糊

描き始める前に、膠を用意しなくてはならない。牛のゼラチンまたは魚の軟骨から作られた特別な糊だ。何時間も水に溶かしてから、素焼きの鉢に入れ、70℃未満の温度で火にかける。それはフィルターにかけられた後紙に塗られる。絵具が付着しやすくするためだ。その効果は季節によって違う、匙加減が微妙なところだ。膠の濃度が濃いと顔料はくすんでしまうし、薄いと付着力が弱くなってしまう…。

平松礼二 *睡蓮と紅葉*　2010 年

6. 緻密な動作

気持ちは描く態勢にはいったまま、画家はその基板を床の上に置き、墨（和墨）で輪郭の下絵を描く。墨は唐墨とよく似たもので、灰色松の煤（すす）から作られる。水が加えられ、絵具はコエゾイタチ、タヌキ、ヤギ、鹿といった動物の毛で作られた筆で塗られていく。筆の効果による色のぼかし：それぞれのテクニックによって使う筆と所作が違ってくる。多くの日本画の匠と同様、平松礼二もまた、細かく切られた金箔、銀箔、プラチナ箔 の破片を用いる。



平松礼二 *睡蓮図・遊* 2011 年

7. 装飾的モチーフ

日本画は、光彩を添え装飾になる、という豊かな可能性を持つ。星形の小さいオレンジ色の葉、柳の葉のフリンジ、ミニチュアの睡蓮の群れ：まるで装飾的印刷物のように、平松は図式化されたモチーフの繰り返しで遊ぶ。交差した波で表現された繊細な金の線はあの貴重な折り紙のモチーフを思い出させて…、全て画家が意図した強いコントラストだ：金色の背景から浮き出ている黒色の葉の群れ、暗い水面の上の明るい緑の葉や鮮やかなピンクの睡蓮、そして群青色の地に落ちる金色の大粒の雫…

平松礼二　*池に金色の雲映る* 2011 年

8. 空間と非対称

構成について言えば、現代抽象芸術と 19 世紀の日本の浮世絵の影響が混在していると言えよう。例えば平松は、画面を２分割する木の幹（ジヴェルニー　モネの池　２０１３）を据えて、安藤広重による濱松冬枯ノ図（東海道五十三次）を想起させる　という独特の選択をしている。日本人画家たちは、絵がほっと息がつける空間を大事に考えており、非対称の構図に対しても同じことが言える。平松の作品においては、スペースはしばしば多くの色（青と赤、緑と金）で区切られ、水流のようなくねくねとした線がそれを横切っている。瞑想への小道というべきか…。